

英米古典簿記書研究拾遺（承前）

久野秀男

目次

- I 序論
- II 商品勘定の変遷と課題
- III 『帳合之法』・『馬耳蘇氏複式記簿法』・『商家必用』の帳簿組織
——比較英米古典簿記書論および現代簿記教育論——
- IV 元帳の総括および次期開始記帳について
——「英米式決算法」への道——
- V 著者名等の呼称（カナ文字表記）およびタイトル・本文のスペリング等について
- VI Bookkeeper か Accountant か
- VII 押韻の仕訳ルール
- VIII 仕訳帳金額欄の変遷と問題点
- IX ジョーンズ簿記の原理とその批判者達
- X 幻の書・『オールドカッスル簿記書』とその周辺
- XI 英米古典簿記書解題（追加）
ブラウン（John Brown）の小冊子（1616）
ダフォーン（Richard Dofforne）の第2の簿記書（1670, 第3版）
ディルワース（Thomas Dilworth）の簿記書（1777 in London, 1803 in New York）
マルシュ（C. C. Marsh）の初期の簿記書（1832）
メサーベイ（A. B. Meservey）の簿記書（1875）
- XII 補項（以上、第16巻・第1号に収録。以下、本号）
- XIII 統括勘定の出現
第1節 統括勘定の意義
第2節 統括勘定への発展段階
第3節 人名勘定と擬人説
第4節 統括勘定方式と整理勘定方式
- XIV 元帳の変遷
第1節 設題
第2節 元帳各勘定口座の丁（頁）数欄（Folio, Fol., Fo., Reference, R.）
- XV イタリア式（ベニス式）『簿記テキスト』の完成
——Pacioli(1494), Tagliente(1525) Manzoni (1534)——
- XVI 損益計算志向の伝統
- XVII 改良イタリア式帳簿組織
- XVIII スネルの簿記書：付, South-Sea Bubble

XIII 統括勘定の出現

第1節 統括勘定の意義

統括勘定 (controlling account) の出現は、近代簿記の特色のひとつであるといわれている。たしかに、経営規模の拡大は、会計の集約性と分散性つまり集権的会計管理と分権的会計管理とを同時に可能にするような仕組みを必然的に要請するものであった。ここに、勘定組織・帳簿組織・業務分掌組織の三者が一体となって機能するような管理組織が必要とされた。かくして、充実した各種の補助簿が業務各課に分属して分散的・分権的・部分的・直接的な会計管理の機能を果たすとともに、主要簿は専ら会計課 (経理部) に専属して、集中的・集権的・全体的・間接的な会計管理の機能を果たすようになる。また、これと並行して、総勘定元帳に開設される殆どの勘定は、統括勘定化して、それぞれに対応する数多い補助簿を統括する機能を果たすようになる。

商業簿記における最も典型的な統括勘定の事例として、一般に、売掛金勘定と買掛金勘定とが挙げられる。これらの両統括勘定と人名諸勘定との歴史的経過は、会計史上に最も興味深い事例をのこしている。以下、この命題を中心として論ずる。

なお、統括勘定 (controlling account, control account) として、補助元帳を独自平均帳 (self-balancing ledger) とするために開設される勘定のことを考える向きもあるが (例えば、スプラークの簿記書, 1907. その他米国では)、一般には (とくに英国では)、この種の勘定は、整理勘定 (adjustment account) とよんで区別している。いうまでもなく、総勘定元帳に開設される統括勘定 (例えば、売掛金勘定) と、分割元帳 (例えば、売掛金元帳, 得意先元帳, accounts receivable ledger, customer's ledger) に開設される整理勘定 (総勘定元帳

勘定) とは、貸借反対に記録の全部が照応する関係にある。この点に関連して、後に再説する。

英米 (加) 古典簿記書を通覧する限り、次のような事象が、明らかに認められる。すなわち、現金出納帳や手形記入帳、あるいは仕入帳や売上帳のような補助簿は、古くから採用されており、また、時代が下るにつれて、main (principal) books と subsidiary (auxiliary) books という名称の区別も一般化するようになる。しかし、売掛金勘定 (account receivable)、買掛金勘定 (account payable) という統括勘定の出現、売掛金 (得意先) 元帳 accounts receivable (customer's) ledger、買掛金 (仕入先) 元帳 account payable (creditor's) ledger の両補助元帳の登場は、案外に時期的に遅いのであって、その出現は、前世紀も後半に入ってから、場合によっては、むしろ今世紀の初頭の頃と考えてもよいくらいである。売掛債権および買掛債務の記録に、総勘定元帳上で人名諸勘定を用いる時代は、思いのほか永くつづいたのである。実名商品勘定の永い時代が終って機能的な商品勘定 (混合商品勘定) が出現したのは、おおむね、前世紀の中葉とみてよいが、売掛金・買掛金の両統括勘定の出現は、それにやや遅れる。おりしも商品勘定の3分割 (仕入勘定, 売上勘定, 繰越商品勘定) がはじまった頃とみてよいと思う。

第2節 統括勘定への発展段階

売掛金・買掛金の両統括勘定にそくして、その発展段階を区別すると、次のとおりである。

第一段階……売掛債権および買掛債務については、仕訳帳・元帳および試算表の上で、すべて人名諸勘定を用い、売掛金 (得意先) 元帳、買掛金 (仕入先) 元帳のような補助元帳を開設していない。

第二段階……仕訳帳，総勘定元帳，試算表の面では，依然として，数多くの人名諸勘定を用いているが，貸借対照表(balance sheet)ないしそれに相当する会計報告書の面では，account receivable 売掛金，account payable 買掛金，の両勘定を，それぞれ，資産の側と負債の側に掲示する。

第三段階の (A) ……元帳の直列的な分割を図る方式。すなわち，総勘定元帳に開設した両統括勘定によって，両補助元帳を完全に統括し，主要簿と補助簿の管理機能が立体的に完備した状態に達している。

第三段階の (B) ……元帳の平列的な分割を図る方式。すなわち，売掛金元帳 (Debtor's Ledger)，買掛金元帳 (Creditor's Ledger)，一般元帳 (General Ledger) および私的元帳 (Private Ledger) のように。この場合，整理勘定 (Adjustment Account) を採用して Self-Balancing Ledger とする。一般元帳に開設される Debtor's Ledger Adjustment Account (売掛金勘定，売掛金元帳整理勘定) と，売掛金元帳に開設される General Ledger Adjustment Account (一般元帳整理勘定) とは，貸借が等額で反対に照応する。「統括勘定と整理勘定とは貸借が等額で反対に照応する」といってもよいが，一般に，この場合には，統括勘定 (controlling account) とはいわない場合が（とくに英国では）多いようである。第三段階の (A) の直列的分割の場合で，総勘定元帳に開設される統括勘定が補助簿（補助元帳）を統括するというケースでは，その補助元帳が独自平均帳であるとは限らない。むしろ，独自平均帳でない場合の方が一般であろう。独自平均帳化する必要性は，「元帳を平列的に分割」することからくるのである。

元帳の直列的（垂直）分割，元帳の平列的（水平）分割という用語を便宜上使っているが，勿論，一般用語ではないので，ここで具体的

に補足説明しておく。前者の場合では，元帳（総勘定元帳）と補助簿（売掛金元帳，買掛金元帳等）との関係は，統括勘定を媒介としていわば立体的・成層的な結合をしている。補助簿のうちのいわゆる補助元帳は，あくまで補助簿であって主要簿ではない。すなわち，総勘定元帳と同列ではない。後者の場合では，売掛金元帳，買掛金元帳，私的元帳 (Private Ledger) は，一般元帳と同列の主要簿であって，補助簿ではない。「元帳の分割」という概念を，厳密にあてはめる場合には，かかる平列的分割のことを指すと解釈すべきではなからうか。元帳の直列的分割の場合は，厳密な意味では，「元帳の分割」ではないと考えられる。

そこで，先の第三段階の (B) では，同列の数種（に分割された）の主要簿である元帳が，それぞれに独自平均帳であることを要求されるのも当然の帰趨であろう。また，先の第三段階の (A) では，総勘定元帳と補助簿とは，統括勘定を媒介として成層的・直列的に結合しているのであるから，かかる体制が確立している以上，補助簿それ自体を独自平均帳化するメリットに乏しい。記帳の正確性の検証は，統括勘定と補助簿の照合によって可能である以上，補助簿を独自平均帳化することによって行なう自己検証，統括勘定と整理勘定の照応による検証という二重の手間をかける必要は，まずない。

手許にある資料についてみるのに，ソーヤー (J. Sawyer, 1852) やバタースビー (T. Battersby, 1878) の簿記書の場合のように，前世紀の後半になっても，依然として，第一段階に止まっている。参考のために，ソーヤー簿記書の貸借対照表 (p. 3) と，バタースビー簿記書の残高勘定 (p. 25) を掲示する。数多い人名諸勘定に注目されたい。（次頁の表参照）

借方			1851年1月1日			貸借対照表			貸方		
元頁						元頁					
1	ウィリアム・ヘンリー商会	103	16	0	13	リチャードソン・ステバンス	36	11	0		
2	ジェームス・エドワード	1015	11	3	14	ジョージ・タムソン	40	11	1		
3	トーマス・プリンス	16	5	6	15	アイザック・ロマックス	13	6	0		
4	ベンジャミン・ワトソン	201	3	4	16	ジョージ・ヘイドン	0	16	3		
5	ワトキンズ・ライダー	156	13	0	17	ジェームス・ハウエル	112	4	0		
6	ヘンリー・アービン	61	12	0	18	トーマス・スネルグローブ	1501	11	3		
7	マーシャル・ベティ	304	15	0	19	オルター・デービー	2013	5	4		
8	ジェームス・ウィンゾル	16	10	6	20	ヘンリー・マーシャル	501	1	1		
9	シンプソン・ペイン	113	0	0	21	ジェームス・オーウィック	16	11	6		
10	ウィリアム・クリントン	42	14	4	22	ウィリアム・ジルパーロック	45	0	0		
11	ジェームス・ホザリಂಗム	31	3	2	23	フレッド・ワーレン	201	12	0		
12	ダドロー兄弟商会	1116	12	1	24	ヘンリー・ヘイター	1	14	6		
					25	ジェームス・ジャクソン	316	11	5		
					26	ヘンリー・ウィルソン	0	16	4		
					27	ウィリアム・フィンチ	0	12	3		
					34	預金	711	15	3		
		3170	16	2			5513	19	3		
35	支払手形	5013	12	3	34	現金	36	11	0		
					36	受取手取	126	13	0		
					P.L.1	不動産	1011	0	0		
					P.L.2	家産	300	0	0		
					P.L.3	商 品	8026	16	3		
							£				
		8193	8	5			15014	16	3		
P.L.4	資 本	6821	7	10							
		£	15014	16	3						

(注) P. L. 1~3とあるのは、私的元帳 Private Ledger (一種の秘密元帳)である。この点に関しては、後述する。

借方			残 高			貸方					
1878年		£	s.	d.	1878年		£	s.	d.		
1月31日	機 械 等	2	3500	0	0	1月31日	支 払 手 形	2	200	0	0
	銃 鉄 等	2	1800	0	0		S. ブラック	6	50	0	0
	土 地	1	1000	0	0		P. ベル	6	200	0	0
	エンジン・ボイラー	1	995	16	8		G. プレイ	7	5	0	0
	工 具 器 具	1	7474	1	8		ライダー商会	8	40	0	0
	同上(鑄物場)	2	2589	3	4		J. スティール	8	500	0	0
	備 品	2	50	0	0		P. ストーン	9	11	0	0
	現 金	2	1	0	0		S. ウィルソン	9	300	0	0
	受 取 手 形	2	990	0	0		資本(主)	1	26019	6	8
	預 金	3	2021	5	0						
	J. ブース	7	1250	0	0						
	J. デール	7	9	0	0						
	J. ホール	8	245	0	0						
			21925	6	8				21925	6	8

英米古典簿記書研究拾遺（承前）（久野）

第二段階への発展を示す典型的な事例としては、イングリス(W. Inglis)の簿記書(1849)をあげたい。仕訳帳の面でみられる残高勘定への振替仕訳での数多くの人名諸勘定の実況と、売掛債権の合計額 (2530・2・11), 買掛

債権の合計額 (2291・8・2), この両者を Balance Sheet 上で、売掛金 A/cvs. Rec.¹⁰ および買掛金 A/cvs. Pay.¹⁰ (Accounts Receivable, Accounts Payable) として示している実況とを注目されたい。

		仕 訳 帳			借 方			貸 方		
3月 31日	残高.....			借方	8010	18	11			
	商品	£	1832	8 6						
	コーヒー		235	1 8						
	ワイン		136	0 0						
	家什		118	15 0				2322	2	2
	J. ターナー.....	£	305	9 0						
	T. ダンダス.....		238	5 8						
	A. ジョージ.....		402	15 5						
	R. アイランド.....		49	2 10						
	J. プリングル.....		559	5 2						
	W. ジェルダン.....		290	9 8						
	W. タムスン.....		20	3 6						
	G. ナイト.....		664	11 1				2530	2	11
	受取手形.....							926	8	10
	ユニオン銀行預金.....							2180	10	0
	現金.....							51	12	0
	合計 借方. 残高				8010	18	11	8010	18	11
	T. ジョンストン.....			借方	207	17	6			
	アーピング商会.....			//	359	7	6			
	W. グラハム.....			//	420	4	7			
	モーチマー商会.....			//	98	13	4			
	J. リード.....			//	280	0	2			
	R. カニンガム.....			//	123	15	9			
	J. キャメロン.....			//	643	7	5			
	W. ブラック.....			//	158	1	11			
					2291	8	2			
	支払手形.....			//	1132	15	9			
	割引(元帳, 176頁参照).....			//	30	0	0			
	J. ハミルトン 純資本 $\frac{1}{2}$ の持分.....			//	2278	7	6			
	R. ボイド 同 上			//	2278	7	6			
	残高.....							8010	18	11
	合計 貸方. 残高				8010	11	11	8010	18	11

Balance Sheet

ハミルトン・ボイド

18 3月31日		2291	8	2	18 3月31日		2322	5	2
	To 買掛金					By 商 品			
	" 支払手形	1132	15	9		" 売掛金	2530	2	11
	" 割 引……………	30	0	0		" 受取手形	926	8	10
		3454	3	11		" ユニオン銀行預金	2180	10	0
	" J. ハミルトン 純資の½ £ 2278 7. 6,					" 現 金……………	51	12	0
	" R. ボイド	4556	15	0					
	同 上	8010	18	11			8010	18	11

第3節 人名勘定と擬人説

すくなくとも簿記書の上でみる限り、すでにのべたように、人名勘定の時代、つまり、総勘定元帳上で売掛債権と買掛債務を記録するのに数多い人名諸勘定を用い、試算表あるいは Balance Sheet の上でも同様の状況が認められる時期は、思いのほか永くつづき、前世紀末頃も依然としてそうであった。このことに関し、次のような反問ないし評論がなされるかも知れない。

簿記の『テキスト』の上で、そのような事情が認められるのは、前世紀ともなって尚、そのような事情が一般化しているのは、簿記の教育上の配慮にもとづくのだと。つまり、債権・債務の増減変動の記録を簿記のルールにそくして教える場合、例の擬人説（借主、貸主）を適用するに際しては、人名勘定はまことに好都合である。簿記の『テキスト』の上で、人名勘定の時代が永くつづいたのは、この角度からみて当然であると。

かかる傾向を顕著に示すケースとして、現今の英国の簿記テキストをあげることができよう。ここでは、1967年に第21版を刊行した代表的なテキスト *Munro's Book-Keeping and Accountancy*, by Andrew Munro, Twenty-First Edition, by Alfred Palmer, London

を用いて売掛債権・買掛債務を記帳する方式によって基礎的な知識・技術を習得させた上で、243頁以下では、*Self-Balancing Ledger* というタイトルで「元帳の分割」（いわゆる平列的・水平的な分割）を提示している。先の第三段階の (B) の方式を採用するのである。なお、*Principles and Practice of Book-Keeping and Accounts*, by B. G. Vickery, Twentieth Edition Revised by B. Mendes, London, 1971 では、第5章で独自平均帳化した「元帳の分割」の帳制を示しているが、用語としては、先のように *Debtor's (Sales) Ledger Adjustment Account* と *General Ledger Adjustment Account* とはせず、*Sales Ledger Control Account* と *General Ledger Control Account* としている。Adjustment Account ではなく Control Account という用語である。*Accountancy, A Textbook for the Professional Accountant and Advanced Commercial Examinations*, by W. Pickles, Second Edition in conjunction with G. W. Dunkerley, London, 1955 (p. 239) では、*Sales Ledger Adjustment Accounts* のように Control でなく Adjustment を用いている。

日本の簿記テキストでは、一般に、「整理勘定」(Adjustment Account) とよんでいるようである。

第4節 統括勘定方式と整理勘定方式

先述の第三段階の(A)の直列的(垂直)分割の場合を統括勘定方式とよび、第三段階の(B)の平列的(水平)分割の場合を整理勘定方式とよんでおく。いうまでもなく便宜的な呼称として。前者は、次第にその数を増してきた人名勘定口座を悉く総勘定元帳に開設する煩をさけ、補助元帳の採用・充実によって個別的かつ直接的な債権・債務の会計管理を補助簿に専管させ、総勘定元帳に統括勘定を設けて補助元帳を文字通り統括させたのである。後者は、債権・債務に関する人名諸勘定記録の実体(明細)、損益および資本金に関する記録の実体(明細)あるいは、場合によっては、商品勘定や固定資産勘定までも、総勘定元帳(一般元帳)から分離し、元帳の分割をはかっている。もっとはっきりいえば、総勘定元帳の面では、債権・債務(得意先、仕入先の実況)や損益等の具体的な内容が判明しないように意図されているのである。売掛金元帳と買掛金元帳とは、Secret Ledgers(秘密元帳)としての性格が顕著なのである。

古くから、損益諸勘定や資本勘定を私的元帳(Private Ledger)に移し、秘密元帳(Secret Ledger)にする実務はみられたようである。売掛金元帳と買掛金元帳とを独自平均帳化するという発想は、これらを秘密元帳にするという意図をひめていると考えられる。総勘定元帳に売掛金・買掛金の両統制勘定を開設するという意図は、人名諸勘定の明細記録を補助簿にゆだねることに外ならぬ。

以上の観点からいえば、一部にみられる次のような見解は、必ずしも適当ではない。

「簿記書に説明してある独自平均帳は、初期のイギリス簿記学の説明であるが、つづまるところ、単に補助元帳の全部の勘定の総合計を貸借平均させるための人為的な小手先細工であり、一部の学者が机上で考察した空論

にすぎず、実用された例も見ない」と。

すでにのべたように、独自平均帳(化)は、「元帳の分割」さらにいえば、秘密元帳制と表裏一体のものであるとみななければならぬ。そうだとすれば、秘密元帳という制度それ自体の存在理由は問わないこととして、すくなくとも、「独自平均帳なるものは一部の学者が机上で考察した空論」であると断定することはできない。たしかに「人為的な小手先細工」のようにもみえる。また、百歩ゆずって小手先細工であるといってもよいでしょう。しかし、それは、必要に応じてなされた工夫であった。いわゆる「必要は発明の母」というわけで、専門家の酔狂ではない。

パチオリないしパチオリ派の簿記にみられる3主要簿制(*tre libri principali*)について、極めてローカルなもの、あるいは、実務レベルからみて立ちおけているもの、とする批判が古くからある。そのゆえんは、主として、複合(分割)仕訳帳制への発展の萌芽が全くみられないこと、元帳の分割(秘密元帳制)がみられないこと、に求められている。秘密元帳制は、簿記の歴史とともに古いのである。

なお、先掲のソーヤー簿記書の貸借対照表・貸方の末尾を注目されたい。こうなっている。

P. L. 1	不動産	1011	0	0
P. L. 3	家 什	300	0	0
P. L. 3	商 品	8026	16	3

P.L.とはPrivate Ledger(私的元帳)のことで、明らかに、「元帳の分割」と考えられる。

また、借方の末尾に、P.L. | 資本 | 6821 | | 7 | 10 | とあるのも、同様である。

とくに本項を設けてこれを論じたゆえんである。

XIV 元帳の変遷

第1節 設題

「取引事実を同種項目ごとにまとめて計上・記録するという観念は、元帳成立の基本であり、これなくしては元帳は存在しない。しかも、元帳なくしては、われわれが理解している意味における簿記はないのである」(リトルトン『会計発達史』、片野訳書・133頁)といわれたこの帳簿の変遷については、すでに、リトルトン(A. C. Littleton)が主著『会計発達史』(前掲)の第7章<元帳の変遷>(Accounting Evolution to 1900, Part I., Chap. VII. Changing Types of Ledger Entries)で、詳細に取り扱っている。その主旨は、「元帳(が)、初期における取引の完全表示の文章形式から、現代における高度の省略的表式記帳の方式まで発展した証跡」を解明することにむけられている。まことにオーソドックスなものであり、問題の核心をついたといえよう。

しかし、この第7章に関していえば、資料が余りにも初期イタリア簿記ないし簿記書に偏っており、その後の変遷についてふれることが、まことに少ない。彼自身、「その後の二百年間に変化はほとんどなかった」(訳書、p. 161)とのべているくらいである。率直に言って、彼の解析は、大雑把にすぎるし、また、観念的なところがある。

もうすこし、簿記技術面に立ち入った細かい(長期にわたる)観察が必要なのではないか。

第2節 元帳各勘定口座の丁(頁)数欄 (Folio, Fol., Fo., Reference, R.)

現今のわが国の簿記書では、この丁(頁)数欄には、多くの場合、「仕丁」という見出しが入っている。例えば、下掲のとおりである。

仕丁とは、仕訳帳(Journal)の丁数(folio)という意味であることはいうまでもない。丁数(folio)とは、帳簿の左右2頁分(同じ頁付のしてある)のことであるから、もっと簡単に頁数という意味をはっきりさせて、仕頁としたほうが今日では明確であろう。ともかくも、この欄は、仕訳帳の記録と、その転記先である元帳各勘定口座の記録との連絡・脈絡をはっきりさせ、帳簿の有機的な結びつきを明確にするためのものであり、記帳の完全性の要件となっている。仕訳帳に元丁欄が開設されていることは、いうまでもない。

ところで、仕訳帳に元丁欄が設けられ、元帳の何頁に転記されているかを明らかにするという方式は、簿記の歴史の上では、仕訳帳の登場とともに古い。

一例としてここでは、*Domenico Manzoni, Quaderno doppio col suo Giornale, etc., secondo il costume di Venetia*, 1540年版の実況を紹介する。なお、パチオリ以来の最初の重要な簿記書といわれているこの著者名につき、ブラウン編『会計史』の『書目』、エルドリッジの『書目』、*Historical Accounting Literature*の『書目』では、悉く *Domenico* とあり、また、ペラガロ(Edward Peragallo)

現 金

日付	摘要	仕丁	借方	日付	摘要	仕丁	貸方

aen Capitael van my I. C. L. 1500,

- Giovanni A. Moschetti (Dell'universal trattato di libri doppii, 1610)

$\frac{-1}{1}$ P Resti tratti dol Libro Crose

= A Cauedal di me Gio.

- Lodoivco Flori (Trattato del modo di tenere il libro doppio domestico, 1636)

$\frac{r 1}{r 1}$ Collegio nostro // ad Andrea del Sole

Per(P), A(a), dobet 等の高度の符号化がみられる。また、貸借の区別のための、//, =, といった記号化もみられる。

ところで、元帳各勘定口座の参照頁欄についてみると、一貫して先掲のように「仕丁」となっていたわけではない。18世紀の末頃から19世紀の初頭にかけて、大きな変化を示して今日にひきつがれている。

この参照頁欄の記載につき、

仕訳の相手勘定の元帳口座の丁数を記載する方式のもの、これを便宜上、L型とよぶことにする。

仕訳帳の丁数を記載する方式のもの、これを便宜上、J型とよぶことにする。

L型とJ型および参照頁欄のないものの3類型を区別し、手許にある英米(加)の簿記書についてみると、次頁の表のとおりとなる。ここでは、著者名とカッコ内書に刊行年次を示しておく。

この調査結果は、実にはっきりした特色を示している。

(i) 大陸簿記書であるマンゾーニ(1534)をはじめとして、18世紀末頃までの英書は、例外なくL型である。

(ii) 18世紀末頃からJ型が登場してくるが、前世紀ともなると、この調査では、偶然ではあるが、L型とJ型とが、同数でおのおの6である。全般の傾向としても、L型とJ型とがあい半ばする状態とみてよからう。

(ii) 米(加)書の場合では、最初の簿記書であるミッチェル(1796)以来、この調査に関する限り、例外なく、悉くJ型であって、L型は存在しない。偶々 T. Dilworth(1802)と W. Jackson (1818)とがL型であるが、ともに英書で、前者は1777年(London)、後者は1785年(London)のそれぞれ米国版である。米書が例外なく悉くJ型であるのは何故か。英米両国を同時代で比較した場合に、かかる相違が目立つのは何故か。これは実に興味ある課題である。なお、損益・残高の両集合勘定に、名目諸勘定・実体諸勘定を振替えるに際して、仕訳帳を経由しないで直接口座間の振替記帳を行なったような場合に、この両集合勘定口座の丁数欄の記入はどうなるのか。また、これに相応ずる各勘定口座の丁数欄の記入はどうなるのか。仕訳帳での振替仕訳それ自体が行なわれていないのであるから。この場合の丁数欄の数字は、例外的に、J型でなくL型のものとなる。すなわち、元帳面の丁(頁)数である。そこで両集合勘定口座に限り、丁数欄に Led. というタイトルを付することがある。例えば、メサーベイ(A. B. Meservey)の簿記書(1875)がこれである(p. 126)。

(iii) 英書については、とくに J. Mair (1736)と B. Booth (1789)に注目されたい。伝統派の首領で教師のメヤーはL型、改革派の首領で商人のブースはJ型(J型の先駆者とみてよからう)である。

伝統派ともみるべきL型は、元帳の摘要欄(乃至、その相当欄)に仕訳の相手勘定科目を書くという伝習と結びついたもののように思われる。今日のテキスト風を示すところ(52頁上段)なる。

相手勘定科目が2以上の場合では、諸口と書く。総括的な合計転記が一般化してくると(現に一般化している)、摘要欄は、殆どが、諸口となる。こうなるとは、諸口と書いても書かなくても同じで、要するに相手勘定科目は

英米古典簿記書研究拾遺（承前）（久野）

相手勘定（口座）の元帳丁数：L型	仕訳帳の丁数：J型	参照頁欄なし
<p>(英書)</p> <p>D. Manzoni (伊, 1534) J. Ympyn (英訳, 1547) J. Peele (1553, 1569) J. Weddington (1567) J. Mellis (1588) J. Carpenter (1632) R. Dafforne (1635) J. Collins (1653) A. Liset (1660) S. Monteage (1683) R. Colinson (1683) R. North (1714) A. Macghie (1718) A. Malcolm (1731) H. Stephens (1735) J. Mair (1736) W. Gordon (1765) D. Dowling (1765) T. Dilworth (1777) R. Hamilton (1777)</p> <p>P. Kelly (1801) J. Sedger (1807) P. Deighan (1807)</p> <p>M. Power (1813)</p> <p>R. Langford (1822)</p> <p>T. Battersby (1878)</p>	<p>(英書)</p> <p>B. Donn (1778) B. Booth (1789)</p> <p>J. Morrison (1807)</p> <p>J. Lambert (1812)</p> <p>I. P. Cory (1839) B. Foster (1843) D. Sheriff (1850) F. C. Krepp (1858)</p>	<p>(英書)</p> <p>F. W. Cronhelm (1818)</p>
<p>(米・加書)</p> <p>T. Dilworth (1803) W. Jackson (1811)</p> <p>(但し、上掲の簿記書は、いずれも英書の米国版)</p>	<p>(米・加書)</p> <p>W. Mitchell (1796)</p> <p>J. Benett (1820) L. Preston (1829, 1851) J. C. Colt (1833) S. W. Crittenden (1850) W. Orr (1872) C. C. Marsh (1832)</p> <p>Bryant & Stratton's (1871) B. Meservey (1875)</p>	<p>(米・加書)</p> <p>J. C. Colt (注)</p> <p>W. H. Richmond (1846) (注)</p>

(注) J. C. Colt と W. H. Richmond については、本文参照のこと。

元 帳

現 金

日	付	摘 要	仕 丁	金 額	日	付	摘 用	仕 丁	金 額
×	×	資 本 金	1	500,000	×	×	備 品	1	150,000
	×	諸 口	2	150,000		×	消 耗 品 費	〃	10,000
	×	諸 口	〃	50,000		×	当 座 預 金	〃	200,000
						×	商 品	〃	100,000

不明なのである。より根本的には、このように相手勘定科目を記入することに、本来、意味があるのかどうか。元帳の機能からみて。問題はむしろここにある。結論的にいえば、元帳が勘定別の分類・統計の記録である以上、当該科目名（この例示では、現金）と貸借の金額がわかればよいのである。仕訳の相手勘定科目を知る必要はないのである。しかるに、伝統的には、スネル（Charles Snell）の *The Merchants Counting-House etc., 1718*, の **RULES to be observed in the BALANCE or Chose OF YOUR LEDGER**, (p. 21) に代表される次のような見解が、なかなか根強いのである。

Then you ought to *Point* all the Articles on *Debit-side* of your *Ledger*, and *Point* as you go along, all the Counterparts on the *Credit-side* of your *Ledger*.

摘要欄に仕訳の相手勘定科目を記入する場合、元帳の相手勘定口座の開設場所を示す丁数（左右両頁にまたがっている場合）、あるいは頁数を、摘要欄と金額欄の間に開設された参照頁欄に書きこむのは、すこぶる自然というべきである。

ただし、ここでとくに注意すべき点がひとつある。それは、前述したように、元帳の摘要欄に仕訳の相手勘定科目を書くこと、その記載それ自体が無意味だということである。仕訳帳は勘定分解の、元帳は勘定分類の帳簿であるとする原点に立ち返らねばならぬ。簿記テキストの根強い伝習として、今日の簿記

テキストでなお、元帳・摘要欄に仕訳の相手勘定科目を記載している。この点は大いに反省すべきであろう。

元帳の記帳を、その機能にそくして、簡略化しあるいは簡明にしようとする試みは、すでに久しい以前から、ごく一部ではあるがみられた。

例えば、フォスター（B. Foster）は *A Concise Treatise on Commercial Book-Keeping, etc., 1839* (3rd. ed. pp. 67~68) でいう。

The Ledger should be kept in the most concise form. The insertions ought never to exceed a line each, or to contain more than the *Title* of the Journal entry to which they refer. To a person unacquainted with bookkeeping, this brevity is apt to be considered unsatisfactory ; and it was formerly the practice to add, in each line, a few explanatory words ; this is still done in some counting houses ; but such explanation are practicable only a limited business.

リッチモンド（W. H. Richmond）の *A Comprehensive System of Book-Keeping, etc., 1846* (Montreal) は、次頁のような元帳を示した (pp. 34—)。摘要欄に記入の金額は、内訳金額である。科目と貸借の金額の記帳のみで足りるとする建前である。

また、コルト（J. C. Colt）の *The Science of Double Entry Book-Keeping, etc., 1837* (3rd. ed.), Cincinnati は、その巻末の

LEDGER A.

<i>Dr.</i>		Stock.			<i>Cr.</i>			
J. A. P.	1 28 0 0,.....				J. A. P.	1 2115 0 0,.....		

<i>Dr.</i>		Merchandize.			<i>Cr.</i>			
J. A. P.	1 750 0 0, 1 3400 0 0, } 2 57 12 6, }	5207	12	6	J. A. P.	1 133 10 6, 2 481 17 3, ... 2 108 10 9,.....	615	7 9
	2 165 14 5, 2 33 14 3,.....	199	8	8				

<i>Dr.</i>		Cash.			<i>Cr.</i>			
J. A. P.	1 650 0 0, 2 215 18 3,.....	865	18	3	J. A. P.	1 600 0 0, 1 52 0 0,..... 2 144 16 9,.....	652	0 0

<i>Dr.</i>		Bills Receivable.			<i>Cr.</i>			
J. A. P.	1 600 0 0, 1 42 0 0, 2 51 0 0, 2 350 0 0, 2 45 0 0,.....	642	0	0	J. A. P.	2 42 0 0,.....		
		401	0	0				

Practical Forms for Keeping Books の No.5 (pp. 172~173) として、次のように述べ、かつ、元帳の様式につき、伝統的な form と実践的な form とを対比しつつ示している。*William Watson* の口座の摘要欄には相手勘定科目の記載はない。

Old fashioned accountants even now make

use of the words *To* and *By*; always Debiting an account *to* another account or sundries; and Crediting *by* the account or sundries. Others omit writing the account which forms the balance for each sum throughout their Leger, retaining nothing but the dates and amounts.

PRACTICAL FORMS

Dr.		Robert Oliver.		Cr.					
1837	Jan. 1	To Merchandise.....	8	300 00	1837	Jan. 7	By Cash	23	200 00
"	5	" do.	20	60 00	"	26	" do.	61	200 00
"	20	" Charles Smith	29	10 00	Feb.	16	" do.	89	50 00
"	26	" Merchandise.....	61	211 50	"	18	" do.	90	100 00
Feb.	7	" do.	85	11 50	Mar.	1	" Martin H. Crans.....	115	50 00
"	19	" Merchants Bank	91	200 00	"	6	" William E. Montague...	121	50 00
"	26	" Bills Payable	101	150 00	"	"	" Balance	122	173 00
"	23	" Merchandise.....	110	60 00					
Mar.	1	" do.	115	65 00					
"	"	" do.	116	75 00					
				1, 123					1, 123 00
Mar.	6	To Balance	122	473 00					

Dr.		William Watson.		Cr.					
1837	Jan. 1		11	500 00	1837	Jan. 21		60	850 00
"	5		21	50 00	Feb.	15		92	250 50
"	20		22	75 50	"	25		"	150 00
"	25		45	92 00	Mar.	9		95	600 00
Feb.	8		81	10 00	"	26		100	750 00
"	22		85	250 00	Apr.	1		115	600 00
"	25		92	35 00					
Mer.	10		97	10 50					
"	12		99	50 00					
"	26		105	100 00					
"	30		110	150 00					
Apr.	1	To Balance		1, 777 00					
				3, 100 50					3, 100 50
							By Balance		1, 777 00

Dr.		Joh Hickman.		Cr.			
1837	Jan. 1	To Bible	150	1837	Jan. 1	By James F. Conover	100 00
"	" 2	" 30 yds. blue Broad Cloth @ \$ 5	150 00	"	" 4	" Cash	50 00
"	" 5	" 10 yds. Silk, @ \$ 1	10 00	"	" 18	" do.	200 00
"	" 8	" 200 lbs. Sugar, @ 15 ¢	20 00	"	" 28	" do.	500 00
"	" 10	" 85 " Coffee, @ 15 ¢	12 75	"	" 31	" Balance	449 75
"	" 15	" 10 " Tea, @ \$ 1	10 00				
"	" 17	" 3,000 lbs. Tobacco, @ 15 ¢	450 00				
"	" 20	" 1,000 gs Molasses, @ 50 ¢	500 00				
"	" 25	" 50 gs Madeira, @ \$ 2	100 00				
"	" 28	" 100 lbs butter, @ 12 ¢	12 00				
"	" 30	" 50 vols Family library	30 00				
"	" "	" Burlamaqui' SN. & P. Law...	3 50				
			1,299 75				1,299 75
Feb.	1	To Balance	449 75				

[173]

「十年一日のごとき」、否、「百年一日のごとき」旧慣の墨守も、もうこの辺で終りとしたいものである。元帳の丁（頁）数欄に、仕訳の相手勘定科目の元帳口座丁数を書くという伝統に終止符をうって、断然、仕訳帳の頁数（仕丁）を記入する方式に切り換えたときに、元帳の摘要欄に仕訳の相手勘定科目を記入することも、同時に廃止すべきであった。筋道

からいえば、本来、そうすべきであり、そうなるべき筈であった。

なお、蛇足ながらつけ加える。先述したように、丁数 Folio とは、元帳の各勘定口座が、左右両頁に見開いて、左頁に借方（側）の記録が、右頁に Contra（対象）・貸方（側）の記録がなされていた往時の様式の名残りである。例えば、次掲のようなフォームである。

(左 頁)				(右 頁)							
		F.	L.	s.	d.			F.	L.	s.	d.
17 × ×	Cash.		Dr			17 × ×	1	Contra.		Cr	
Jan.	1	To Stock for ready money.				Jan.	1	By Linen, for 300 pieces.			
		To 何々						By 何々			

(1) が左右両頁の端に出ているが、これが第1丁という意味である。

元帳の各勘定口座が、2頁にまたがることなく1頁に開設されるようになると、丁数といういい方それ自体がおかしいことになる。

今日のわが国の簿記書で、漫然と、丁数あるいは仕丁欄等といったのは、甚だこっけいと言わざるを得ない。第1に、今どきの若者に、丁数とか仕丁といったもわかりっこない。頁数、仕頁とかけばよいのである。

XV イタリア式(ベニス式)『簿記
テキスト』の完成—Pacioli(1494),
Tagliente (1525), Manzoni (1534)

1534年(邦暦で天文3年, 織田信長誕生)に, 仕訳帳と元帳との雛形と記帳例を完備した最初の(おそらく)『簿記テキスト』が刊行された。マンゾーニ(Domenio Manzoni)の次掲の簿記書である。

Quaderno doppio col svo giornale, novamente Composto, et diligentissimamente ordinato, secondo il costum di Ventetia
DI DOMINICO MANZONI

(注。このタイトルページによると, Dominico Manzoni とある。各種の『書目』や諸文献では, いずれも, Domenico Manzoni である。Dominico か Domenico か問題であるが, ひとまず, 以下では Domenico としておく)

マンゾーニ簿記書の成立を, 図式的(schematic)に示しておく, こうなる。

1494. Pacioli, Summa	}	1534.
• 『教則』 (Instructions)		Manzoni, Guaderno
1525. Tagliente, Considerando	}	doppio
• 『雛形』 (Examples and illustrations)		『教則』と 『雛形』

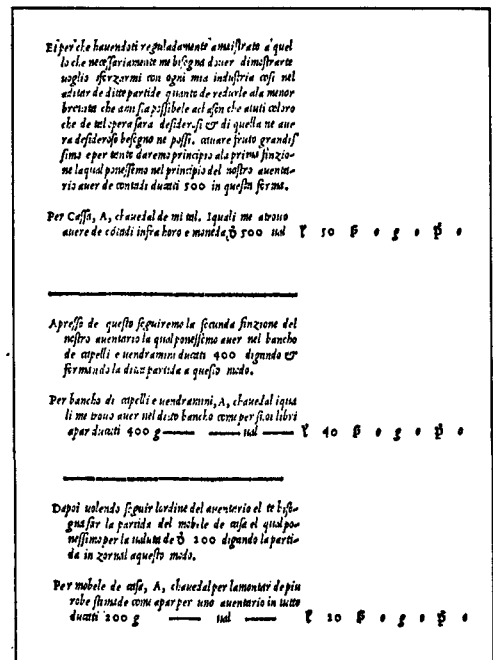
この Tagliente, Considerando とあるのは, Giovanni Antonio Tagliente (Ioanni Antonio Taiente) の 1525 年(邦暦で大永5年)にベニスで刊行された次掲の簿記書である。

Considerando io Ioanni Antonio Taiente quanto e necessaria cosa a li nostri magnifici gētishomeni & adaltri mercatanti el landabile modo de tenere conto de libro dopio cioe, el Zornaale, el Libro conlalphabette secondo el consueto de questa inclita Citta di Venetia, etc.,
Considerando とは, 英語の considering

that である。また, このタイトルの末尾に, secondo el consueto de questa inclita Citta di Venetia 「彼の有名なベニス市風の」(according to the habit of the famous City of Venice) という表現がみえている。また, このタイトルでみる限り(他の箇所でもそうだが), 著者名は, 一般の簿記史書や『書目』等にみえている Tagliente ではなく, Taiente である。

僅か47頁(通しで。但し, ページの記載はない)の小冊子で, 内容は, 仕訳帳に相当する帳簿の雛形である。元帳に相当する帳簿の雛形や開始・締切の記帳はない。

冒頭の Per Cassa, A, chaudal de ni tal. (借方・現金, 貸方・資本主)の仕訳にはじまる部分の実況を示す。



マンゾーニの仕訳帳(Giornale doppio)の冒頭は, 次のとおりである。

$1 \frac{1}{2} P$ Cassa // A Caudal
 (cash) (stock)

de mi Alluise Vallaresso, etc.

この両者ともに、借方と貸方を示すために前置詞の符合の Per (p), A (a) を用いている点を注目されたい。これをベニス形式(the original Venetian form of journal entry) という。英語の By と To に当る。高度なテクニカル・タームである。なおマンゾーニの場合は、元帳への転記先を示す口座の丁数 1, 2, とが記載されている点、つまり先の場合では、現金勘定口座（元帳の第1丁）と資本主勘定口座（元帳の第2丁）が明示されているが、*Tagliente (Taiente)* の仕訳帳では、この（重要な）記載がない。転記先である元帳の雛形がないのだから、元帳丁数がないのも当然ではあるが。また//も用いていない。

マンゾーニの仕訳帳の末尾は、損益勘定の貸借差額を資本（主）勘定に振替える次の仕訳となっている。

300 $\frac{44}{33}$ P Pro et danno // A Caue-
dal mi Aluise Vallaresso, etc.

1760 Adi ultimo Febraro.		
294	Pro et danno // A dominarij, per danno seguito trato in reflo, per saldo di quello 24	Di Saldo le parole de li buoi, pender di quello in quello per la mola.
295	Pro et danno // A Spesi de viver de casa, per piu spesi fute, come in esse appar, per saldo di quello, 27 14 9 12 14	Di Saldo le spese al veder la mola pro a vivero.
296	Fuit delle possessione de Maria // A Pro et dan- no p futo di quello p l'anno presente fute de Luito 154, per saldo di quello, 27 14 9 12 14	Di Saldo le fute nelle possessione, le pro de vivero.
297	Pro et danno // A Spesi d'averi per piu spesi fute l'anno presente, come in esse appar, per saldo suo 27 32 9 12 14	Di Saldo le spese d'averi, le ditte pro a vivero.
298	Pro et danno // A Spesi de salerandi in monte, per piu spesi fute l'anno presente, come in esse appar, per saldo di quello 27 48 9 12 14	Di Saldo le spese de salerandi, le ditte pro a vivero.
299	Pro de Vecchia in monte // A Pro et danno, per mi- lia fute, come in quello appar, per saldo suo, 27 15 0 9 12 14	Di Saldo el pio de parche, le ditte pro a vivero.
300	Pro et danno // A Caue dal de mi Aluise Vallar- esso, per saldo fute de l'anno 1760, fatto in reflo, per saldo di quello, 27 300 9 22 17 12 14	Di Saldo per el pio de l'anno nel suo m- ontal, per l'anno presente.

Fine di presente Giornale, tenuto per mi Aluise Val-
laresso, per conto d'ognitrascio, et negozio de me
occorso, da di 8 Marzo 1760, fin ad ultimo
Febraro del duto millesimo, et qual ordi
netamente de giorno in giorno, ho
scritto di mia mano, et in esse piu
antada scrivere, per haver
quello concluso et faldato
in 12 parche, lequal
ho riportate nel li-
bro nouo se-
gato
A

左に、参考のために、マンゾーニの仕訳帳
(Giornale Doppio Segnato In Venetia M D
XXXX.) のこの部分を示す（第一頁は前出）。

損益勘定 (Pro et danno) への振替記帳は、
すべて仕訳帳を経由している。パチオリの場合
では、この振替記帳につき仕訳帳を経由し
ないのみならず、わざわざ、仕訳帳を経由し
ない理由（取引に非ずとする）までのべている。
パチオリ簿記書のレベルの低さを示すひとつ
の証左でもある。

パチオリの場合では、仕訳帳・元帳等の計
算例や帳簿雛形(examples and illustrations)
は、全くない。専ら簿記の「教則」(instruc-
tion) に相当するような内容になっている。
また、*Tagliente (Taiente)* の場合は、僅か
に仕訳帳の雛形があって、「教則」に当るよ
うなまとまった記述がない。マンゾーニの場
合は、この両者を統合するような位置にある。
パチオリ以来の最初の仕訳帳と元帳の記帳雛
形を完備した、そして、教則と雛形という
『簿記テキスト』の定型をなした最初のもの
といえよう。教則に相当する部分は、パチオ
リの丸写しだといわれているが、記帳雛形が
ある点で、イタリア簿記の普及に資したこと
は、疑いなくところである。いわゆるパチオ
リ系簿記の普及は、その実、マンゾーニ簿記
書の貢献とみた方があたっていると思う。

ペラガロ (E. Peragallo) は、*Origin and
Evolution of Double Entry Bookkeeping
etc.*, 1938 (p. 60以下) で、パチオリ以来の最
も注目すべきこのマンゾーニ簿記書について、
とくにその帳制の特色を指摘している。パチ
オリと対比すると、次のとおりである。

Pacioli, 当座帳 (memoriale) → 仕訳帳 (gi-
ornale) → 元帳 (quaderno)
(いわゆる, *tre libri principali*,
3 主要簿制)

Manzoni, 分割当座帳 (libretti) → 仕訳帳 →
元帳

<i>Spese minute di casa</i>	(家事費明細帳)
<i>Spese di villa</i>	(農事費明細帳)
<i>Spese di salariadi</i>	(給与明細帳)
<i>Spese di fabbrichi</i>	(家賃明細帳)
<i>Intrade di fitti</i>	(賃貸料明細帳)

この libretti (複数形, 単数形ならば *libretto*) を構成する個々の *libretto*, 例えば *Spese di Villa* (Farm expenses, 農事費) の *libretto* (book) については, その合計額をもって, 仕訳帳 (*giornale*) に, 次のように仕訳する。

129 $\frac{20}{1}$ P *Spese di Villa* // A

Cassa,

なお, この帳制は, 「仕訳帳の分割」ではないので, 蛇足ながら付言する。

また, ブラウン編『会計史』(p. 122) には, マンゾーニ簿記書につき, 次掲の注目すべき指摘があるので, とくに紹介する。

The stock difficulty he shirks by assuming that there are no unsold goods on hand.

洋の東西を不問, 複式簿記を採用していようといまいと, 「商品の実在高(棚卸高)と帳尻(借方残高の場合)の差額が利益」という財産法による利潤計算の原理, 一般論としていうと「資本の実在高と帳簿残高の差額が利潤」とすず利潤計算の原理は, 商人のつとに体得していたところであるから, 実務家(bookskeeper)であったマンゾーニがこれを知らぬ筈はないと思うのだが, いかがなものか。ブラウン編『会計史』の先掲の見解には, にわかには賛成し難い。

ブラウン編『会計史』(p. 120) で指摘しているように, 「パチオリは記帳難形 (examples) をまったく用いていない。記帳難形の助けがなくては, 初心者がこの技術を修得するのは, すこぶる困難である」(Paciolo uses

no examples, and without the assistance of these the art can hardly be acquired by a novice.) といわねばならぬ。マンゾーニ簿記書が注目されるゆえんである。

XVI 損益計算志向の伝統

会計(正確には企業会計)の基本的機能は, 個別資本循環運動の継続的・計数的把握と, 必要に応じ, 随時もしくは定時に, 資本と利益を分離し, 資本増殖部分すなわちある期間に生じた利益を適正に測定することにある。この基本的機能に関する限り, 往時の商人簿記の場合であっても, 現代の大企業会計の場合であっても, 何ら変わりはない。会計の一貫した損益(成果)計算志向, 商人簿記の *Dynamik* は, 昔も今も何ら変わりはない。

19世紀末のドイツ商法学(者)は, 本来, 会計実務の伝統とは無縁の(あるいは, 少なくとも第二義的な)「財産」概念, 財産(価値)計算志向を, 会計(学)の領域に, いささか無神経に持ち込んだといわざるをえない。シュマーレンバッハ流の没価値論, 動態観, 損益(成果)計算重視の考え方は, 商法学に対する激しい抵抗であると同時に, 伝統的な簿記・会計の伝統ないし「常識」を, 再確認したにすぎないともいえる。

簿記の損益計算志向そのダイナミズムを, 最も端的に示すものは, 商品(混合)勘定である。すでにのべたように, 商人達は, 伝統的に, 商品の仕入につき左(頁)側にその明細を(仕入量, 単価, 仕入原価額等)を記帳し, その売上につき右(頁)側にその明細(売上量, 単価, 売上原価額等)を記帳した。この記録の意味するところは, 商品という「財産」の増減を継続的に記帳して在高を管理することを意図しているのではなくて, W(貨幣) → G(財貨) → W'(貨幣)の資本循環運動を忠実に商品勘定口座に反映しようとするものであり, 「資本

の実在高（商品の棚卸高）と資本の帳簿在高（商品勘定の帳尻）との比較」によって資本増殖部分としての利益（売上総利益）を測定しようとしている。商品という「財貨」の管理計算という意図ならば、当然、左（頁）側の記録に対応して、右（頁）側の記録の内容は、売上商品につき原価をもって記帳し、帳尻は、常に商品増（左頁）と商品減（右頁）の差額としての手許商品在高を示すものとなろう。簿記テキスト（とくに日本の）では、この方法を「分記法」と称し、前述の伝統的な方法を「総記法」と称しているが、すでにのべたように、いわゆる「分記法」は、まず一般に採用されたためしはないし、もともと、このような簿記用語も、日本のテキストの場合はいざしらず、必ずしも一般化しているわけではない。

「資本の実在高と帳簿在高との比較」という方法原理は、いわゆる「財産法による利潤計算」の一般原理として知られている。在高の時点比較という点、いかにも静態的であるかの如くであるが、その基調は、あくまでも資本循環のプロセスを極めて動態的に把握しようとしているのである。

さらに、簿記の勘定口座の総括（general balancing）の側面から考察してみると、周知のように、手順としては、名目諸勘定口座の記録すなわち収益諸勘定と費用諸勘定との各口座を、損益勘定口座に振替えることによって、つまり、文字どおりの closing entry によって「締切り」、かつ、損益勘定口座の貸借差額（つまり当期純利益もしくは当期純損失）を、資本（主）勘定に振替えることにより損益勘定口座自体もまた closing（entry）される。資産、負債および資本の各勘定よりなる実体（在）諸勘定は、伝統的な方法では、残高勘定口座に振替え集合される。この勘定口座へ振替え集合される諸勘定、すなわち、いわゆる実体（在）諸勘定は、損益計算が遂行された後に元帳に残留している諸項目、remainders, remains, the rest であるとする

考え方は英書においては、極めて古くからある。例えば、拙著『英米（加）古典簿記書の発展史的研究』（昭和54年5月刊、第一法規出版）の94頁に引用したダフオーン（R. Dafforne）の *The Merchants Mirrour : etc.*, 1635（p. 17）等である。また、拙著『前掲書』の265頁に紹介してあるコリー（Isac Preston Cory, *A Practical Treatise on Account, etc.*, 1839）の場合では、とくに Rest を商品棚卸（stocktaking）と同義語に用いているが、この Rest という簿記手続の目的について、極めて明確に、資本と損益との分離・確定にあるとしている。かかる発想は、シュマーレンバッハのいわゆる損益計算への「未解消項目」（*Schwebende Posten, the suspense items*）と何ら異ならない。商人簿記の伝統は、もともと動態的なのである。このことは、先述した Balance Sheet の起源、あるいは、残高勘定の形骸化に徹しても明らかである。すなわち、かかる元帳における残留諸項目のもっている意味は、本来は、専ら検証の機能に求められている（いた）のであって、けっして、財産状態の（客観的）表示とか財産の（客観的）価値計算に求められたものではない。

以上の論点を、もののみごとに「逆立ち」にしてみせたのが、「複式簿記の始祖（patriarch）パチオリ以来の最大の簿記学者」として著名な Simon Stevin である。1608年に刊行の *Livre de Compte de Prince A La Maniere D'Italie, etc.*, p. 35 と 1604年に刊行の *Verrechnung van Domeinen, ende vorstely Boeckhouden*, p. 35 およびカツ（K. Pats）の英訳（Translation by p. Kats, *The Institute of Bookkeeper's Journal*, London, Dec. 1927.）を61頁以下に紹介する。資本在高（借方、貸方）表（今日いういわゆる英国式貸借対照表）の「証明」（PREVVE D'ESTAT, STAET PROEF.）として損益（借方、貸方）表が示されている。

「資本在高 (*Estat ou capital, staet of capitael, Estate of Capital*) 表の検証手段として損益 (*Proussit & perte, Winst en verlies, Profit and Loss*) 表が位置づけられており、損益諸項目を *remainders (the rest) les restes des postes, de restem der postem* であるとする。

なお、いささか蛇足だが、前述の「複式簿記の始祖 (*patriarch*) パチオリ以来の最大の簿記学者」といったいい方は、止めた方がよいと思う。パチオリと簿記 (《計算記録詳論》) に関しては、すでにベスタの説その他に私見をまじえて種々のべたので再説しない。類比したケースでいえば、明治6年6月と翌7年6月に、福沢諭吉は、*Bryant and Stratton's Common School Bookkeeping, etc.* を訳述して『帳合之法』を刊行した。これがわが国で最初の簿記テキストである。そうだからといって、何人も福沢を評して、「わが国における簿記 (学) の始祖」とはいわぬであろう。福沢は、開化の先達であり、偉大な教育者ではあっても、簿記 (学) の始祖ではない。パチオリは、大数学者であり、イタリア・ルネッサンスの代表的文化人ではあっても、簿記 (学) の始祖ではない。また、*Simon Stevin* が「……以来の最大の簿記学者」であるかどうかも、同様に疑問であるといわねばならぬ。

XVII 改良イタリア式帳簿組織

周知のように、3主要簿制 (*tre libri Principali*) すなわち、日記 (当座) 帳 → 仕訳帳 → 元帳の伝統的・古典的な帳簿組織のことを、一般に、イタリア式 (ベニス式) と称するのに対して、現金出納 (仕訳) 帳と仕訳帳 (普通仕訳帳) との2種の仕訳帳に分割した方式、複合 (分割) 仕訳帳制への第一歩ともいべきこの方式を、一般には、改良イタ

リア式と称している。

イタリア式簿記 (*Die italienisch Buchhaltung*)、改良イタリア式簿記 (*Die erweiterte italienische Buchhaltung*)、ドイツ式簿記 (*Die deutsche Buchhaltung*)、フランス式簿記 (*Die frazösische Buchhaltung*)、イギリス式簿記 (*Die englisch Buchhaltung*)、アメリカ式簿記 (*Die amerikanische Buchhaltung*) という用語のあるところからみると、ドイツの学者の分類・命名のようである。

複合 (分割) 仕訳帳制への萌芽ないし端緒は、主としてオランダ簿記実務の影響下に、英国のごく初期の一部の簿記テキストにすでにみられたことは、前述したとおりである。しかし、全般的にみて、複合 (分割) 仕訳帳の普及は、時期的には、18世紀的から19世紀にかけての頃からとみてよいと思う。ブース (*B. Booth*) の簿記書 (1789) が、まさしく時代を画する存在であったことは、すでにのべた。

この時期までに、僅かにみられた帳簿組織の変化は、3主要簿制の圧倒的な支配下において、いわゆる改良イタリア式簿記と称された仕帳帳の2分割にみられたぐらいのものである。

今日、改良イタリア式と称される最も原始的な分割仕訳帳制にも、立ち入って考察すると2つの種類のものが。便宜上、その1をスネル型といい、他をディルワース型とよんでおく。

[スネル型]

後出のスネル (*Charles Snell, 1670—1733*) が、1701年にロンドンで刊行した簿記書 (*Rules for Book-Keeping, etc.*) にみられる。

現金取引を現金出納 (仕訳) 帳に記帳し、非現金取引を仕訳帳 (普通仕訳帳) に記帳する。元帳へは、これら2種の分割した仕訳帳から転記する。現金勘定口座へは、現金出納 (仕訳) 帳から月次に一括して合計額を転記する。現金出納帳以外の補助簿は、純然たる

ESTAT DE MOY DIRIC ROSE

faict sur le dernier de Decembre 1600.

Estat ou capital debet

Par Arnout lacques fol. 14	51. 8. 0.
Reste debet mis ici pour solde de ce compte	3140. 9. 1.
Somme	3191. 17. 1.

Estat ou capital credit

Par noix fol. 7 - 173 ^{ss} 5 enc. à 7 ^{ss}	
la livre, faict	60. 13. 34
Par poi-vre fol. 7 - 120 ^{ss} à 40 ^{ss} la	
livre, faict	20. 0. 0.
Par Omar le Noir fol. 9	513. 12. 0.
Par Adrien Yver fol. 11	150. 6. 0.
Par Pierre le Blanc fol. 11	448. 0. 0.
Par Jacques l'Esté fol. 13	54. 18. 6.
Par Cassé fol. 19	1944. 7. 5.
Somme	3191. 17. 1.

De sorte que Debiteurs avec argent comptant & marchandises, montant ici plus que le credit, pour valeur du capital sur le dernier de Decembre 1600 - - - - - 3140. 9. 1.

Mais au dernier de Decembre 1599, où au cōmencemēt de l'année 1600, ce qui est un mesme, le capital estoit de 2153 ^ℓ 3 ^{ss} 8 ^{ss}, car tirant le debet 514 ^ℓ 6 ^{ss} du credit 2667 ^ℓ 9 ^{ss} 8 ^{ss}, reste comme dessus - - - - - 2153. 3. 8.

Lesquels soubs trait des 3140. 9. 1, reste pour ce qui est conquesté sur ceste année, & requis en cest estat - - - - - 987. 5. 5.

PREVVE D'ESTAT.

MAis pour voir maintenant si le susdit va ferme, ceci en sert de preuves: l'adjouste toutes les restes des postes qui augmentent ou diminuent le capital, ce que sont les restes des postes qui ne vindrent point en la precedente composition d'estat, comme n'appartenant point à son essence: Et parce qu'ils ont parties de gaing & perte advenues au temps de ces livres de compte, qui est depuis le janvier 1600, lesquelles si on fermoit le livre (comme se fera au suivant 10 chapitre) viendroyent sur compte de prouffit & perte, il faut qu'alors par cela se trouve aussi prouffit de 987 ^ℓ 5 ^{ss} 8 ^{ss}: A ceste fin je commence à visiter le Grand livre dès le commencement, & me rencontre au premier la poste de clous sur laquelle je trouve gaing de 75. 4. 7. puis me rencontrent noix & autres biens, comme s'ensuit ci bas. Mais il est encōre à noter, que marchandises restantes se comptent ici au mesme pris comme au precedent estat, parce que nous supposons leur valeur estre telle: Si on voulut poser en l'un & l'autre que le pris fut changé, il se pourroit aussi faire.

Prouffit & perte debet.

Par despens de marchandise fol. 16	57. 7. 0.
Par despens de maison fol. 16	107. 10. 0.
Somme	164. 17. 0.
Reste credit comme prouffit accordant avec le compte precedent mis ici pour solde	987. 5. 5.
Somme	1152. 2. 5.

Prouffit & perte credit.

Par gaing sur clous fol. 5	75. 4. 7.
Par gaing sur noix fol. 7	109. 7. 2.
Par gaing sur poi-vre fol. 7	18. 19. 0.
Par gaing sur gingembre fol. 9	41. 8. 4.
Par compte de prouffit & perte (dout il faut souvenir que la poste au temps de ceste operation avoit en debet seulement deux parties de 100 ^ℓ et 12 ^ℓ , mais en credit trois parties comme 4 ^ℓ 3 ^{ss} 4 ^{ss} , et 15 ^ℓ , avec 1000 ^ℓ) fol. 19	907. 3. 4.
Somme	1152. 2. 5.

STAET VAN MY DIERICK

Roofse gemaecte op den laetsten December 1600.

Staet of capitael debet.

Per Aernout Iocols fol. 14	51. 8. 0.
Rest debet hier gheselt by flote van desen	3140. 9. 1.
Somme	3191. 17. 1.

Staet of capitael credit.

Per noten fol. 7 - 173 fl 5 onc. 101 7 fl	
s'pont, comt	60. 13. 2.
Per peper fol. 7 - 120 fl 104 40 fl s'pont, comt	20. 0. 0.
Per Omaer de Swarte fol. 9.	513. 12. 0.
Per Adriaen de Winter fol. 11	150. 6. 0.
Per Pieter de VVitte fol. 11	448. 0. 0.
Per Jacques de Somer fol. 13	54. 18. 6.
Per casse fol. 19	1943. 7. 5.
Somme	3191. 17. 1.

Sulcx dat Debiteurs, met ghereet ghelt en waren, hier meer bedragen dan Creditours voor weerde des capitaels op den laetsten van December 1600 - - - - - 3140. 9. 1.
 Maer op den laetsten December 1599, of t'begin des jaers 1600 dat een selve is, was het capitael van 2153 fl 3 fl 8 fl , want treckende den debet 514 fl 6 fl , vandē credit 2667 fl 9 fl 8 fl , blijft als voorē 2153. 3. 8.
 Welcke getrocken vandē 3140 fl 9 fl 1 fl , blijft voor t'ghene datter op dit jaer verover is, ende in dese staet ghesocht wiert - 987. 5. 5.

STAET PROEF.

MAER om nu te sien of het boveschrevē vast gaet, so dient dit tot een proef: Ick vergaer al de resten der posten van vermeerderende of verminderende capitael, t'welck sijn de resten der posten die inde voorgaende staetmaking niet en quamen, als totte wesentlicke staet niet behoorende: Ende want de selve sijn partyen van winst en verlies voorgevallen inden tijt deser bouckhouding, dats sedert 0 Ianuarius 1600, welcke by aldienmen het bouck flote (ghelijck int volgende 10 Hooftstuck gedaē sal wordē) op rekening van winst en verlies souden commen, soo moet dan daer deur oock verovering bevonden worden van 987 fl 5 fl 5 fl . Tot desen einde beghin ick het Schuldbouck te overloopen van vooren aen, ende ontmoet my eerst de poste der naghelen fol. 5, waer op ick winst bevinde van 75. 4. 7. daer na ontmoeten my noten en ander goeden, als hier na volght. Doch staet noch te ghedencken, dat overschietende goeden hier berekent worden ten selven prijse als inden voorgaenden staet, om dat wy nemen haer weerde soo te wesen, wildemen in d'een en d'ander nemen den prijs verandert te sijn, men soudet oock meughen doen.

winst en verlies debet.

Per oncoften van coomschap fol. 16	57. 7. 0.
Per oncoften vanden huysse fol. 16	107. 10. 0.
Somme	164. 17. 0.
Rest credit als prouffys o'veerecommende mette voorgaende rekening hier gheselt per soldat	987. 5. 5.
Somme	1152. 2. 5.

Winst en verlies credit.

Per winst op naghelen fol. 5	75. 4. 7.
Per winst op noten fol. 7	109. 7. 2.
Per winst op peper fol. 7	18. 19. 0.
Per winst op gimber fol. 9	41. 8. 4.
Per rekening van winst en verlies (wiens poste te ghedencken is dat ten tijde deser wercking in debet alleelic hadde twee partyen, te wete na 100 fl en 12 fl , maer in credit drie partiē als 4 fl 3. 4. en 15 fl met 1000 fl) fol. 19	907. 3. 4.
Somme	1152. 2. 5.
F 3	Nudan

THE ESTATE OF DERRICK ROOSE			
MADE UP ON THE LAST DAY OF DECEMBER, 1600			
Estate of Capital debit		Estate of Capital credit	
	£ s d		£ s d
Per Arnold Jacobs,	51 8 0	per Nuts	60 13 2
Balance debit, put here		per Pepper	20 0 0
in order to close this		per Omar de Swarte . .	513 12 0
'statement	3140 9 1	per Adrian de Winter	150 6 0
		per Peter de Witte . . .	448 0 0
		per Jack de Somer . . .	54 18 6
		per Cash	1944 7 5
Total	<u>3191 17 1</u>	Total	<u>3191 17 1</u>
The remainder at the end of the year is		3140 9 1	
at the beginning of the year it was £2667 9s 8d minus			
514 6 0		<u>2153 3 8</u>	
Increase during the year		987 5 5	
<i>Proof of the Estate</i>			
"In order to make certain that the above Estate is correct I collect all remainders of accounts increasing or decreasing Capital, <i>i.e.</i> , the remainders of all accounts excluded from the above Estate, because they do not represent actual things—but accounts of profit and loss occurred since the 1 st of January, 1600			
<i>Profit and Loss debit</i>		<i>Profit and Loss credit</i>	
	£ s d		£ s d
Per Trading Expenses	57 7 0	Per profit on Cloves . . .	75 4 7
Per Household Ex-		Per profit on Nuts . . .	109 7 2
penses	107 10 0	per profit on Pepper . .	18 19 0
Total	<u>164 17 0</u>	Per profit on Ginger . .	41 8 4
Remaining credit, being		Per Account of Profit	
profit agreeing with the		and Loss	<u>907 3 4</u>
previous account, in-		Total	<u>1152 2 5</u>
serted here as balance.	<u>987 5 5</u>		
Total	<u>1152 2 5</u>		
"Since the profit ascertained in this way is equal to that found by means of the previous estate <i>viz.</i> , £987 5s 5d, this may be taken as the Proof of the work."			

補助簿の位置にとどめている。この間の事情について、次のようにいう（同書の 'Observations' の冒頭より引用）。

The *Book of Trade-Charges, Invoice-Book and Factory-Book*, are purely Copying; and the *Ledger* is form'd from the *Journal and Cash-Book*.

また、*Book of Trade-Charges* 「商費明細帳」の合計額は、現金出納帳へおくる。

[デイルワース型]

前出のデイルワース (Thomas Dilworth) が、1777年にロンドンで刊行し、1803年に米国版（ニューヨーク）が刊行された簿記書 (*The young book-keeper's assistant : etc.*)

にみられる。

彼の場合は、主として初心者の理解に役立つため(後出の引用文)、単一仕訳帳制(イタリア式)に大幅に歩みよったところがある。すなわち、現金取引を現金出納帳に記帳するのであるが、元帳への転記は、専ら現金勘定だけに限定して、その月次の合計額を一括して行なう。現金取引と非現金取引とのすべてにつき仕訳帳を経由して元帳に転記する。Preface (p. 3) で、次のようにいう。

The several Journal entries relating to the receiving and paying of money, though omitted by some book-keepers, are yet used by others, and therefore I have placed them in the Journal as well as in the Cash-Book, judging it most convenient so to do for the learner's sake, that he may understand them the better.

スネル型のいわゆる改良イタリア式 (*Die erweiterte italienische Buchhaltung*) は、案外長く実務界を支配したようである。われわれに身近な実例としては、明らかに英国簿記実務の影響とみられる明治期の日本郵船株式会社 の帳制(但し、現金出納仕訳帳は多桁式で「金銀出納帳」という。仕訳帳を「日記帳」という)がある。一橋大学図書館に原帳簿が所蔵されており、詳細な紹介論文として、西川義朗教授《日本郵船株式会社旧帳簿資料覚え書》(一橋大学研究年報, 商学研究21, 昭和54年3月刊)がある。

XVIII スネルの簿記書: 付, South-Sea Bubble

エルドリッジの『書目』およびブラウン編『会計史』の『書目』によると、スネル(Charles Snell, 1670—1733)の最初の簿記書は、1709年刊の *A guide to Book-keeping acco-*

rding to the Italian Method だという (p. 45, p. 352)。ところが、*Historical Accounting Literature* の『書目』には、この簿記書は掲示されておらず、次のものがのっている。

- (1701) *Merchant accompt, in the true Italian method, etc.* London
- (1701) *Rules for book-keeping, according to the Italian manner: etc.,* London
- (1711) *Accompts for landed-men: etc.,* London
- (1718) *The merchants counting-house: etc.,* London
- (1719) *Book-keeping in a method proper to be observ'd by super-cargo's and factors, etc.,* London
- (1720) *Observations made upon examining the books of Sawbridge and Company. No title page.*

-
- (1714) *Ayres, John*
Arithmitck made easie for the use and benefit of trade-men etc. To which is added, a short and easy method; after which shop-keeper may state, post and balance their books of accompts. By Charles Snell
 - (?) *The element of Italian book-keeping or merchants accompt.*

エルドリッジの『書目』では、前掲の簿記書のほかに、*Accompts for landed-men*(1710)、*The Merchants counting-house*(1720)および *A short and concise method*(1723)が掲示してある。*Historical Accounting Literature* とは刊行年次に相違があり、また、*easy* と *concise* の喰い違いもみられる。

スネルは、1701年(邦暦で元禄14年、浅野長矩の刃傷)にロンドンで、次掲の簿記書を刊行した。

Rules for Book-Keeping, According to the Italian Manner : Now in general use. Directing young accomptants to the Books and Accompts, where the Usual Occurrences in Trade Are to be Enter'd ; And in the STILE proper for such Entrances. By Charles Snell, Master of the Free-Writing-School, in Foster-Lane. London MDCCI.

いわゆる「教則」ともいふべき論述が主体の小冊子で、記帳雛形は、いっさい用いていないが、テキスト臭のない、イタリア式の定型にとらわれていない実践向の簿記書である。

帳簿として、仕訳帳 (Journal), 現金出納帳 (Cash-Book), 商費明細帳 (Book of Trade-Charges), 仕入帳 (Invoice Book), Factory Book (注, 売上帳のこと), 元帳 (Ledger) を用いるのであるが、最も注目すべきは、仕訳帳と現金出納帳 (正確にいうと現金出納仕訳帳) とからなる原初的な複合 (分割) 仕訳帳制を採用している点である。かかる帳制への第一歩とみてよい。

取引 $\left\{ \begin{array}{l} \text{現金取引} \rightarrow \text{現金出納帳} \rightarrow \text{元帳} \\ \text{非現金取引} \rightarrow \text{仕訳帳} \rightarrow \text{元帳} \end{array} \right.$

(但し、現金勘定口座へは、月次一括して合計額を現金出納帳より元帳へ転記。商費明細帳の月末の合計額も現金出納帳へおくる。)

この帳制は、後に実務上でごく一般化したもので、前述のように、明治期の日本郵船株式会社の場合 (一橋大学図書館に原帳簿所蔵) も、この方式である。

現金出納帳以外の補助簿は、そのまま補助簿としての地位にとどめてある。この間の事情を、'Observations' の冒頭で、次のようにいう。

The Book of Trade-Charges, Invoice-Book, and Factory-Book, are purely Copying ; and the Ledger is form'd from the Journall, and Cash-Book.

ハミルトン (Robert Hamilton, 1788) や

ディルワース (T. Dilworth, 1777) も、このような仕訳帳の2分割法を採用しており、単一仕訳帳制から複合仕訳帳制への第一歩がふみ出された。

元帳の締切 (Close), 総括 (Ballance), 繰越の手続に関して、簡明に、次のようにいう (p. 11)。但し、記帳の具体例は示していないし、また、雛形も用いてはいない。

LXIX 利益 (Gains) の諸勘定、損失 (Loss) の諸勘定を、それぞれ、損益勘定の借方・貸方に振替える (注, 仕訳帳を経由するかどうか不明)。損益勘定の差額 (the Foot) すなわち純損益を資本 (注) 勘定に振替える。その他の諸勘定については、貸借の差額 (the Foot) を残高勘定 (Ballance) に振替える (注, 仕訳帳を経由するかどうか不明)。以上の記帳が正確ならば、残高勘定の貸借は必ず一致する。

LXX 旧元帳の残高を貸借反対に新元帳に繰越す。

1711年 (邦暦で正徳元年, 將軍家宣の治世) に、スネルは次の小冊子を刊行した。29頁の小冊子で全文が記帳事例である。タイトル・ページに刊行年次の記載がない。1711年という年次は、*Historical Accounting Literature* の『書目』に従った。

Accompts for Landed-Men : Or ; A Plain and Easie Form Which they may observe, in Keeping Accompts of their Estates. By CHARLES SNELL, Teacher of Writing and Accompts, at the Free Writing-School in Foster-Lane ; With whom YOUNG GENTLE MEN may Board. London, Printed for Thomas Baker, at the Bible and Rose in Ludgat Street.

財産目録および月別の収支計算を示しただけのもので、内容的には殆ど問題にならない。

1718年 (邦暦で享保3年, この前年に大岡忠

相江戸南町奉行となる)に、スネルは、次の簿記書を刊行した。

The Merchants Counting-House : Or, Waste-Book Instances, With Directions for their Stating and Entrances ; By Charles Snell, Accomptant. Printed for the use of his Scholars, At the Free Writing-School in Foster-Lane, London : Where he Teaches WRITING, In all the Hands used in Great-Britain ; ARITHMETICK, In Whole Numbers and Fractions, Vulgar and Decimal ; MERCHANTS ACCOMPTS, By a Complete, Practical, and Approved Scheme : and FOREIGN EXCHANGES ; Who also Teaches the same in French : And Boards Young Gentlemen. London : MDCXCVIII.

冒頭から20頁までに、

Rules for Keeping Merchants Accompts in the True Italian Method. として、Rule 1 ~ Rule 69 を示し、ついで2頁にわたり *Waste-Book Instances, which Rules for their Stating and Entrance.* を示している。全巻以上の22頁という小冊子である。

Rule 1 と 2 は、開始記帳を具体的に説明している。勘定科目や数字(金額)もすべて具体的に示してある。この場合、Stock on the Capital Accompt を相手科目として資産を借方に、負債を貸方に仕訳するのと比べると、別法として、資本(主)勘定でなく、Entrance (開始)、あるいはEntring Ballance (開始残高) という勘定を用いる方法をのべている。開始残高勘定(この名称)を用いた例として、英書としてはめずらしい。なお、仕訳帳や元帳等の帳簿雛形はいっさい用いていない。彼の前著書もそうであるが、このように、帳簿雛形を意識的に(?)使わないという点は、類例がない(すくない)のではあるまいか。以下、同形式で、開始記帳につづく

日常の取引と記帳の説明となっている。大型本のしかも極端に小さい活字組で、具体例は詳細を極めている。

Rule 69 までで、日常の取引を解説し、ついで2頁にわたる前掲の *Waste-Book Instances, etc.* では、諸帳簿 (*Journal, Cash-Book, Charges of Merchandise Book, Invoice Book, Book of Accompts of Sales, or Factory-Book, Ledger*) の締切・総括の手続を解説している。

この項では、第1から第9まで個条書きで、現金出納(仕訳)帳から、元帳の現金勘定口座借方に月次差額を一括転記する手続、現金出納(仕訳)帳から、現金以外の各勘定を元帳の当該勘定口座に個別に転記する手続を詳細にのべている。仕訳帳の解説および同帳から元帳への転記手続については全然のべていない。

この項(p. 21)の後半は、旧元帳の締切手続と新元帳の開始(への繰越)手続をのべている。

この説明で、最も注目されるのは、

'Prepare a sheet of paper Ruled on Debtor and Creditor-sides, with Lines for l. s. d. Then make a Title of Profit and Loss, Debtor and Creditor, And a Title of Balance Going out, Debtor and Creditor, upon the said sheet of paper.

とのべている点である。問題はここに、Balance sheet と Profit and Loss sheet との両シートが提示されていることと、この両シートの機能である。

スネルのこの簿記書に関する限り、仕訳帳・元帳に関する具体的な解説、雛形はまったくない。また、個別の勘定(口座)の解説もまったくない。いうまでもなく、この両シートの事例も掲げてはいない。勘定の貸借差額(the Foot)を両シートに移すだけのべているにすぎない。そこで、この両シートで検証した上で損益勘定と残高勘定の両集合勘定

を元帳に開説するのか（この場合では、両勘定口座への振替記帳は、多くの例では仕訳帳を経由しない）、それとも、この両シートが、両集合勘定それ自体なのか、必ずしもはっきりしない。この両シートが、会計報告書として認識されていることは、まずありえない。

スネルは英国で最初の（すくなくとも初期の）Public Accountant としての仕事をした人物である。彼の South-Sea (Bubble) Company の会計監査の一端は、*Observations made upon Examining the Books of SAWBRIDGE and Company, By CHARLES SNELL, 1720, CHARLES SNELL in his Examination of the Bookes of Turner and Com-*

pany etc. [anon.], 1721 (?), *A Short ANSWER to a Paper bigining with (CHARLES SNELL, etc. 1721 (?)* で明らかである。尚、SAWBRIDGE とあるのは、*South-Sea Company* の役員であった Jacob Sawbridge であり、1719年3月21日、*Sawbridge and Company* が *South-Sea Company* の株式を 125,000 ポンド（時価）で購入することとし、出納役 Knight and Surman に Stokes and Company を仲立ちとして 172,770 ポンド（超過 47,770 ポンド）渡している事情が調査されている。その他、種々な不正経理の実態が明らかにされている。